投稿

現代の占星術、昔の占星術
～古代・中世の占星術に適切な名称を～

加藤　賢一（星学館）

1. はじめに

本研究会の若手の皆さんが占星術を天文普及教育に活用することを目ざした研修会を催すなど、スキルアップに向けた環境作りの新たな活動を始めている（たとえば、栗田他[1]）。若手の方々が広い視野に立っていろいろな手段を駆使して天文普及教育活動の可能性を広げていこうという姿勢には大きな拍手を送りたい。

占星術は古代の人たちが自然と人間界が一体のものと考えたことに根差していて、古代・中世の天体運行論を生み出す動機にもなったから天文教育と相性が悪いはずがないと思うが、それは現代の占星術とやや性格を異にする。そこで、表題のようなことを若手の皆さんにお考えいただけないかと思った次第である。

2. 占星術はオーメンと暦から

占星術はオーメンと暦から成っている。

オーメンはメソポタミアで出土した粘土板文書の一種のことで、ある天体現象に対し、地上にどのような効果が表れるかを記したものである。ここではそれを一般化し、天と地をつなぐ法則を指すことにする。たとえば金星オーメンでは「ニサンヌの２日目に金星が東に現われたなら、疫災に襲われる」となっている。このようなものである。

オーメンだけでは占星にはならない。「ニサンヌの２日目に金星が東に現われ」るのがいつなのかがわからなければ予知とは言えないからだ。そこで、過去・未来の日月惑星位置が記されている暦が必要になる。やがて個人の運勢を出生時天宮図（いわゆるホロスコープ。古代においてホロスコープは東の空を意味したので[3]、本稿ではこのように表現しておく）で占うようになると分秒単位での位置データが必要になった。

3. 占星術の哲学

占星術の原理は天と地がなんらかの形でつながっているという哲学である（形而上の話だから、その根拠は形而下の我々には理解しがたいし、理解しようとするものでもない）。具体的には、メソポタミアのオーメン文書であり、古代ギリシャのストア派の哲学であり、エジプト起源の人体小宇宙説である。

ストア派とはストイックの語源となったアリストテレス哲学の一派だが、人間は自然界の一部であり、自然に即した生き方が正しい生き方であって、人間が自由意思に任せて振舞ってはならないというところから禁欲的になった。この考えは古代から現代まで姿を変えては何度も登場している。我が国の古来の自然観も似たようなものだし、中国の道教や中世のパラケルススにも見ることができる。天と地が一体のものなら天の動きが人間界に影響するはずで、現に太陽の動きによって季節変化が起り、人間のみならず地上のあらゆるものに影響を及ぼしている。このように自然に支配されているのだから、星という自然が人間の生き方を教えてくれるはずだ、と考えるのである。

人体小宇宙説は人間の臓器が日月惑星と対応があり、地上の元素や物質と対応しているという考えである。

これらが一体となって占星術の哲学を構成している。ギリシャにメソポタミア、エジプ

トとアジアの文化が融合しているからヘレニズム文化の一つとされている。ちなみに、ヘレとはギリシャのことである。

この哲学は神が人間の生き方を教えるというキリスト教とは合わないと考える人がいて一旦消されてしまったが、ルネサンス初期によみがえり、神の意思を星が教えると変容してキリスト教と融合した（スコラ哲学）。

こうした自然観が生きているうちは占星術の存在する余地もあったが、地理上の発見、それに伴う天体運行論や測量術、その他の技術の発展があり、宗教改革等の波が押し寄せてきた結果、1600 年頃を境にキリスト教の力が衰える同時に王や貴族などの世俗勢力が力を持つようになり、やがて自然と人間界を一体のものととらえる占星術的な自然観は徐々に衰えていった。

4. 全般的占星術、個人占星術

占星術は大きく全般的占星術と個人占星術に分けられる。全般的占星術は暦（天体運行表）、戦争、飢饉、地理、地誌（人種、国、都市）、気象（農耕、漁労）、天変地異、占星医学（薬学、中世）、錬金術（中世）などの広い分野を扱っていた。いずれも実生活（産業）に密着した分野である。もっともこれらを予知しようとすれば容易なことではない。まず暦を作らなければならないが、今でも簡単ではなかろう。だから、全般的占星術を扱うことができたのは当時の支配層に限られた。そこで、1600 年以降、国民国家への動きが始まると全般的占星術の多くが国の機構に組み込まれるようになり、占星術から消えていった。

なお、占星術の一つに薬学（化学）や錬金術が入ってきたのは 1500 年代で、パラケルススの影響が大きい。ティコ・ブラーエ（1546～1601）は気象観測や錬金術、薬学にも精力的に取り組んでいて、天文学－占星術－錬金術が一つにつながっていた。

これに比べれば個人占星術の比重は低い。社会的な重要性が低いから国家の管理の対象にならず、巷のものとして現在まで生き残ったということだろう。

5. 暦

占星術のもう一つの構成要素が暦である。予知にも、過去のできごとを解釈するにも、ある時刻における日月惑星の位置が必要になる。占星の哲学と暦を結びつけるのが出生時天宮図で、個人の場合も国家や都市の場合も同じように作成する。1572 年新星を詳細に観測したティコは最初に新星を観測した日を起算日として天宮図を作製し、新星の占星術的な意味合いを考察した。

その頃流布していた惑星位置表は「アルフォンソ表」と「プロイセン表」で、ティコは学生時代の 1563 年 8 月 17 日、木星と土星の会合を観測したところ、予報時刻が「アルフォンソ表」で 1 ヶ月、「プロイセン表」で通日違っていた。これではとても当たるような占星はできないから、ティコはこれを改良しようとした。

「アルフォンソ表」は西暦 150 年頃の「アルマゲスト」に基づいて作成され、「プロイセン表」は 1543 年発行のコペルニクスの「天球回転論」に基づいていた。コペルニクスの運行論は（中心が地球か太陽かは別として）「アルマゲスト」とさほど違いがなく、「プロイセン表」が良かったのは公転周期などに新しい値を使えたからで、運行論自体に差があったからではなかった。すると、「アルマゲスト」の優秀さが際立ってくる。それが西暦 150 年頃にできていたのである。プトレマイオスの原動力はどこにあったのだろうか。

6. 古代の学問観と占星術書「テトラビブロス」

プトレマイオスの主著「アルマゲスト」[2]

は「親愛なる Syrus よ、正しい学問に於て理論と実地とが区別されたことは理由のあることと思われる」という印象的な文言で始まっている。プトレマイオスの占星術書「テトラビブロス」[3]の冒頭にも同様のことが書かれていて、学問は理論と応用で完結すること、この場合、理論が「アルマゲスト」で応用が「テトラビブロス」であると言っている。これが古代の、少なくともプトレマイオスの学問観であった。

天体運行論の理論書である「アルマゲスト」の目的は「テトラビブロス」に書かれた占星術を実践するために必要な天体位置データを提供することだった。そう思って「アルマゲスト」を見ると、詳しい理屈がわからなくとも天体位置が得られるように表仕立てになっていて、計算したい日付や時刻を指定すればそれに応じて表から値を持ってくれば求められるようになっている。

「テトラビブロス」に書いてあるのは先に紹介した全般的占星術であり、個人占星術であった。薬学と錬金術が入っていないのは上述のとおりである。しかし、暦、気象、地理、天変地異、医学（病気）、都市経営、親・兄弟・子弟や友人について、個人の運勢、生き方など当時の知恵の多くが詰まっている。それも実生活に直結するものばかりである。頭でっかちの古代ギリシャ市民には見下されていた分野だったかも知れないが、日々の生活に欠かせない知恵の塊だった。

7. 占星術という用語のもたらす誤解

以上のように見てくると、一般的なイメージの占星術という用語では括り切れないほど広い知恵の体系であることがわかる。現在、日常的に目にする占星術は個人の運勢占いという性格が強く、国立天文台の編暦事業や気象庁の気象観測や地震研究を占星術と思う人はいないだろう。しかし、中世までの 2000 年ほどの歴史における占星術はこのように豊富な内容を含んでいたから、同じ占星術という用語で括るのは適切ではない。現代の占星術はまだ 400 年である。

筆者は、若手の皆さんに、この機会にこの中世までの占星術に何か適切な名称を与えていただけないかと思う。その昔とて異常気象はあったろうし、それで飢饉になって多くの人が命を落としたこともあったろう。様々な農耕作業をいつ行うか、宗教行事をいつにするか、あらかじめ決めて準備するには暦が必要になったはずである。まだ現代的な科学がなかった時代ではあったが、そうした現象等にともかくも説明を与えて予知し、準備しておこうと思った末の占星術であり、単なる個人の運勢占いにとどまるものではなかった。だから、別物として適切な名称を考えて戴けないかと願っている次第である。

文　献

[1] 桒田敦基・若手天文教育普及 WG（2025）「若手天文教育普及 WG（わか天）の活動 Ⅳ～占星術をテーマとした研修会の実施報告～」，天文教育，37：34.

[2] 薮内清訳（1982）『アルマゲスト』，恒星社厚生閣

[3] 加藤賢一訳（2022）『プトレマイオスの占星術書テトラビブロス』，説話社

加藤　賢一
kkato@seigakukan.bona.jp